心肺蘇生法に神様は必要か？

「私と一緒に、その人を探してはいただけないでしょうか？」

　妖精モドキは、もう一度同じ言葉を繰り返した。

「俺が？　何故？」

「お願いします！　こちらの世界に来たのは初めてですので、出来ればこの世界に詳しい人に協力して頂きたいのです。ですが、あまり人目に触れるつもりもありません。初めて接触したのがあなたで、出来ればこの世界の住人と接触するのはこれで最後にしたいと、私は思っています。どうか、力をお貸し頂きたい」

　そんな面倒な事やっていられないので、俺のこの疑問は当然のものだろう。それでも、この妖精モドキは頭を下げる。『護衛を任されている』と言っていたのだから、よほどこいつにとって大切な奴なのだろう。

よく考えてみれば、目の前から突然消えて、しかもその原因が俺を蘇生させた事であるのだから、まずは俺に接触しようとしたのも分からなくもない。ついでに、その護衛対象がどこに消えたのかという手掛かりが掴めると期待したのでは無いだろうか。その考えは悪くないと思う。俺がこいつの立場でも、同じことを考えただろうからな。

「ご無理を言っているのは承知しています。しかし、こちらへの被害も考えますと、私共も、こちらの世界に長々といるつもりはありません。この世界の方々にご迷惑をおかけしてしまう前に、一刻も早く……」

「待て。その言い方だと、お前等には何か急ぎの用事があるのか？」

「……はい」

　やけに返答に間があった。一応、聞いてみる。

「何だ？」

「……それは、申し訳ありません。外部の者に話すのは少々問題が……」

　……まあ、そりゃそうだろうな。さっきあんだけ間があったんだから、簡単には言えるような話ではないのだろう。

「なるほど。ならお前は、急ぎの用事があるから協力してその護衛対象を探して欲しい、と、そう言っているわけか？」

「勝手なお願いである事は、重々承知しております」

　頭を下げたまま、妖精モドキは答えた。その様子からも、よほど必死なのだろう。何故そんなに急ぐ必要があるのか知りたかったが、今は聞かないでおくとしよう。それよりも、こいつの頼みを断るか否かが、俺にとって重要な事だ。

　正直に言えば、協力してやりたいと思っている。流石にこんな風に頭を下げられて、断ってしまうのは気が引けた。それに、こいつの護衛対象がどんな奴なのか、気にもなっている。

　だがそれと同時に、俺の直感が、さっさと断ってしまえと警報を鳴らしているのも事実だ。冷静に考えてみても、この不思議な妖精モドキの仲間を探すのは、並大抵の労力では難しいのは目に見えている。事実、こいつの話を信じるならば、その護衛対象は光と共にどこかへ消えてしまったらしいからな。間違いなく面倒な事だろう。

「……おい妖精モドキ。顔を上げろ」

　よく考えた結果、俺はこうすることにした。

　取り敢えず、こいつと目と目を見て話すために、顔を上げさせると、そこには不安そうな色を浮かべている。まぁ、結構無理難題を頼んでいるのだから、そんな表情になるのも無理は無い。

　あんまり変な顔をされても困るので、俺は口角を上げてみせる。それを見た瞬間、妖精モドキの顔が面白いくらい明るくなっていくのが分かった。

「いいぞ。そいつを探すのに付き合ってやる」

「本当ですかっ？」

「ただし」

　そういうと、こいつの顔が凍りつく。本人は切羽詰っているところ悪いが、中々見ていて面白い。

　それは置いておき、俺は言葉を続ける。

「お前等が何でそんなに急いでいるのかを教えてくれる、というのが条件で、だ」

「……えっ？」

「勿論他人には話さない」

　すると、みるみるうちに、凍りついた妖精モドキの表情から色が抜けていく。まさかそんな要求をされるとは思っていなかったのだろう。だが、俺もこんな要求をしたのには理由がある。

さっきこいつは『こちらへの被害を考えると』と言った。つまり、こいつらが長時間ここにいると、俺達にとっても迷惑だという事だ。もしかすると、こいつのいた冥府は、何か面倒事の巻き込まれているのかもしれない。例えば戦争とかだろうと予想したが、まぁそんな事はどうでもいい。俺がこいつの頼みを聞いたのは、こっちに迷惑をかける前に、さっさと自分の世界に帰って欲しいと思ったからだ。

全く、それをネタに無理矢理俺を引き込めばいいものを、こいつは頭が弱いのか、それとも俺を一度とはいえ死に追いやった事を引きずっているのか、面倒な奴である。

　まぁそれは置いておくとしよう。話を戻と、俺がこいつにあんな条件を突きつけたのは、万が一の事を考えてのことだ。最悪こいつの護衛対象を見つけて、元の世界に返したとしても、こちらに被害が及ぶ可能性のある事が何なのか知っておいて損は無い。何か対策が講じられるならそうするし、出来なくても心構えが出来るだけまだマシだと思ったのだ。勿論、単に好奇心が疼いた、というのも理由の一つだが。

　俺の突きつけた条件を聞いて、暫く目を瞑ってウンウン唸っていた妖精モドキだが、やがて仕方ないとでも言うように口を開く。大分長考したようだ。

「……分かりました。ですが、少し長くなるので、それは私の護衛対象を見つけてからでよろしいでしょうか？」

「ああ。いいぞ」

　取り敢えず、まずはこいつの仲間を探すのが先だ。俺が裏路地で目を覚ましてから、まだ一時間も経っていない。ワープでもしていたら話は別だが、今なら、まだこの街から外に出ているとは考えづらい。冥府から初めてこの世界に来たということは、この世界のお金は持っていないと思うで、電車やバス等の交通機関は使えないはずだ。それなら、探す区間も限られる。

「ありがとうございます！」

　妖精モドキは羽を広げて空中に浮くと、再び頭を下げた。面倒な条件を突きつけられたとは言え、やはり一緒に探してもらえるのが嬉しいのだろう。

　だが――

「おい妖精モドキ。礼を言うのはまだ早いぞ？」

「……はい？」

「さっきのは、一緒に探してやるための条件だ。もう一つ、俺がお前等に会ったことを誰にも言わないための条件。要は、口止め料だな。それを要求する」

「……ぇえっ？」

「当たり前だろう？　今は生きているとは言え、こっちは一度そいつに殺されているんだ。それを許すっていうんだから、これくらいの我儘は許容されてもいいはずだぜ」

「……」

「断れば、お前を元の世界に返さない。まあ安心しろ。無茶な要求はしない」

　信じられないというような顔で、こいつは俺を見つめていた。

　当然だ。これだけで終わらせるはずが無いだろう。

「よ……要求、とは？」

　恐る恐ると言った様子で、妖精モドキは俺に聞いた。全く、無茶な要求はしないと言ったのだから、そんな顔をするなと言いたい。

　そして、俺は自分の要望を伝えた。

「お前の……性別を教えろ」

　この時の俺の顔は、多分凄いことになっていただろう。だが、どうしても知りたかった事なのだ。こんなどうでもいい事、わざわざ条件にせずともよいかと思ったが、折角の機会だったので、我慢できなかった。何せ、こいつの姿は、どっちにも取れるようなものだったからな。

　案の定、妖精モドキもこんな事を聞かれるとは思っていなかったのだろう。ポカンと口を開けたまま、俺の目をジッと覗き込んでいた。

　だが、妖精モドキは首を傾げる。

「あの……『性別』って何ですか？」

「性別ってのは、その……男とか女、とか、そういった違い……かな？」

「……？」

「……なるほど」

　どうやら、こいつのいた『冥府』では、『性別』という概念が存在しないのかもしれない。

　だが、それならそれで問題は無い。こいつも人間のような姿をしているのだ。すぐにわかる方法がある。

「なら、お前……脱いでみろ」

「……脱ぐ？」

「服だよ服」

　俺は、この妖精モドキの着ている、今やＧの体液のついたワイシャツを指差した。

　勿論本気で言ったわけでは無い。だが、こう言われて普通に脱げば男だろうし、恥ずかしそうに躊躇うなら女だろうと考えての発言だ。最悪悲鳴を上げられたり、『脱いだら女でした』なんて事になっていても、妖精モドキならセクハラにはならん。

　あと当然だが、『脱いだら女でした』なんてことを期待している訳じゃないからな？

　そう思って質問した矢先、信じられない発言が妖精モドキの口から飛び出た。

「あの……これは服では無く、体の一部なのですが」

　なん……だと？

「つまり……脱げないのか？」

「まあ……そうですね。脱げません」

「つまり性別も分からない……？　と、いうか、服を着ていないってことはまさか」

「はい。私は常に全裸です」

　とんでもない発言に、俺は完全に言葉を失った。『全裸』の概念があるのなら、『性別』の概念くらいあれよ。『常に全裸』って、その姿じゃ『服を着た裸族』か！

　そんな虚しい突っ込みを、俺は心の中でしていた。

「……ん？　えっと……では、探しに行きましょう！」

　その様子に、取り敢えず質問には答えたと見なしたのか、元気よく妖精モドキは拳を上に突き上げて言った。